

技術者の想いを「誰でも、わかる」アニメへ！

～技術部門と広報の社内リレーが生んだ 水道技術の伝え方～



1. 抱えていた課題

日本の水道インフラは、急速な施設の老朽化、財源や人材の不足という危機に直面しています。当社は衛星による漏水検知技術「アステラ・リカバー」と、AIによる管路更新計画の策定支援技術「アセットアドバンス」でこの課題解決に取り組んでいますが、「最先端技術の価値」が十分に伝わらない、という壁がありました。現場を救いたいという技術者の気持ちが強いほど、説明が専門用語に偏り、各事業体のご担当者や消費者の理解が追いつきません。技術者の想いと受け手の理解を隔てる、この「伝わらない壁」の打破が本取組の出発点です。

2. 広報活動概要

この課題を解決するため、目に見えない水道管路の問題を明確に示し、AI等のデジタル技術について、誰もが直感的に理解できるようなアニメーション動画（2本）を制作しました。視聴者が置いてきぼりにならないよう、専門用語を排除し、以下の内容を映像化しています。



<https://youtu.be/yhE-gVtYcUg?si=fR4zrPTUGaTg7vgw>



https://youtu.be/IH5JQFNP9wA?si=Bse-BKkc7aKb_-9i

AIによる更新計画策定支援（アセットアドバンス）

「限られた予算でどの水道管から直すの?」という問いに対し、AIが数億通りの組み合わせから、コストとリスクで比較しながら、最適な更新計画案を導き出す過程を動的なグラフとアニメーションで表現。

衛星による漏水調査（アステラ・リカバー）

「なぜ宇宙から地下の水が見えるの?」という疑問を入口に設定。火星探査にも応用される人工衛星の電波が地面を透過し、土壌水分の違いを見分けて漏水可能性のある箇所を絞り込む仕組みを視覚化。

3. 広報活動の狙い

最大の狙いは、お客様やお取引先に対して複雑な技術を「正確かつ直感的に伝える」ことでした。そのために動画の構成・順番・言葉の表現において以下の工夫を徹底しました。



技術者が使いがちな言葉	受け手が感じること
SARによる土壌水分センシング	意味がわからない
Lバンド電波の誘電率解析	難しくて聞かなくなってしまう
遺伝的アルゴリズムによる最適化	全くイメージできない
管路GISデータの解析による更新計画策定	自分には関係ない話に感じる

専門的解説でなく「素朴な疑問」からスタート

技術解説から始めるのではなく、「なぜ宇宙から地下の水が見えるの?」「限られた予算でどこから直すの?」といった、視聴者が最初に抱く疑問を動画の入口に設定しました。また順を追って答えていく構成にすることで、自然と理解を深められる導線を設計しています。

「地下の管路」と「AI」目には見えないものをアニメ化

地下にある水道管の様子や、衛星による解析の仕組み、AIが最適解を導き出す思考過程など、どれも言葉だけでは「想像できない・目に見えないもの」をアニメーションで視覚化。各動画のテーマに合わせたテイストを選び、視聴者の心理的ハードルを下げました。

技術者の専門用語を直感で伝えることばに変換

「受け手がどのような印象を抱くか」を常に想像し、難解な専門用語を一般的なことばに置き換えました。「GIS」や「SAR（合成開口レーダー）」といった、技術の核心となる用語については、視聴者が説明と映像で補足を加えました。

4. PRポイント

徹底して分かりやすさを追求した結果、技術動画が「誰でも、わかる」コンテンツへと昇華しました。本取組のポイントは、複数のステークホルダーにポジティブな影響を与えた点にあります。

「誠実な姿勢」と「現場への想い」が生んだ、共感の広がり

初めから一般向けの啓発を狙ったものではありませんでした。しかし、動画を視聴したパートナー企業の方々から「家族に自分の仕事を説明できた」「仕事に誇りを持つことができた」という予想せぬ喜びの声をいただくことができました。また広報担当のテーマとして、「最前線で働く社員」の役に立ち、日々のモチベーションや誇りにつながるコンテンツにしたいという願いも込めました。誠実な姿勢と現場への想いが、結果として一般の方々にも「まちの水道インフラがどのように守られているか」を知っていただける内容となりました。

他団体でも模倣できる広報モデル

「どうすれば伝わるか」と常に相手目線で、専門用語を分かりやすい表現に翻訳していく姿勢は、大掛かりな予算がなくても実践可能です。日々の生活を当たり前を支えるインフラについて、もっと身近に感じていただくため、他団体様にも取り入れやすい広報モデルとして共有できると考えます。